

明暗評釈 九

第十九章〜第二十四章

鳥井正晴

第十九章

初出

大正五年（一九一六年）六月十五日・「東京朝日新聞」
大正五年（一九一六年）六月十四日・「大阪朝日新聞」

評釈

第十九章、小説の、「第四日目・土曜日」が、始まる。「入院・手術」の、前日である。

①「座敷から玄関を通つて茶の間の障子を開けた彼は、其所の火鉢の傍にきちんと座つて新聞を手にしてゐる細君を見た。」

(一)、①、「虞美人草」（明治四十年・六月〜十月）の、第七章に、次の如く、ある。
△二人は食卓を立つた。孤堂先生の車室を通り抜けた時、先生は顔の前に朝日新聞を一面に拡げて、小夜子は小さ

い口に、玉子焼をすくひ込んで居た。▽

②、『三四郎』（明治四十一年・九月〜十二月）の、第一章に、次の如く、ある。

△それよりは前にゐる人の新聞を借りたくなつた。生憎前の人はぐうぐう寝てゐる。三四郎は手を延ばして新聞に手を掛けながら、わざと「御明きですか」と髭のある男に聞いた。男は平気な顔で「明いてるでせう。御読みなさい」と云つた。新聞を手に取つた。三四郎の方は却つて平気でなかつた。開けて見ると新聞には別に見る程の事も載つてゐない。一二分で通読して仕舞つた。▽

③、『それから』（明治四十二年・六月〜十月）の、第一章に、次の如く、ある。

△彼は心臓から手を放して、枕元の新聞を取り上げた。夜具の中から両手を出して、大きく左右に開くと、左側に男が女を斬つてゐる絵があつた。彼はすぐ外の頁へ眼を移した。其所には学校騒動が大きな活字で出てゐる。代助は、しばらく、それを読んでゐたが、やがて、倦怠さうな手から、はたりと新聞を夜具の上に落した。▽

「新聞」を掲げているのは、孤堂先生、三四郎、代助と、その「ジェンダー」は、「男性」であつた。

対し、「明暗」では、「女性」である、お延の「新聞を手にしてゐる」日常性の断片が、さり気なく点描されている。「明暗」には、「ジェンダー」の差異はない。

こんな片鱗にも、「明暗」の持つ「新しさ」を、云い得る。

②「津田は二ヶ月以上手を入れない自分の頭に気が付いた。永く髪を刈らないと、心持番の小さい彼の帽子が、被るたびに少しづつ、きしんで来るやうだといふ、つい昨日の朝受けた新らしい感じ迄思ひ出した。」

(一)、『道草』（大正四年・六月〜九月）の、第一章に、次の如く、ある。

△彼の位地も境遇もその時分から見ると丸で變つてゐた。黒い髭を生して山高帽を被つた今の姿と坊主頭の昔の面

影とを比べて見ると、自分でさへ隔世の感が起らないとも限らなかつた。然しそれにしては相手の方があまりに変らな過ぎた。(中略) 帽子なしで外出する昔ながらの癖を今でも押通してゐる其人の特色も、彼には異な気分を与へる媒介となつた。√

前作『道草』において、健三は、「山高帽を被つた」男、島田は、「帽子を被らない男」(第二章)として、明らかに、対比されている。

「帽子を被らない」という表現に、「島田の自我」の、剥き出しになつてゐるということが象徴されている。島田は、「金銭上の欲を満たさう」として、其欲に伴はない程度の幼稚な頭脳を精一杯に働らかせてゐる」(第四十八章)。

対し、「山高帽を被つた」という表現に、「健三の自我」の、包まれているということが象徴されている。

「教育が違ふんだから仕方がない」(第三章)と、「誇りと満足」(第一章)を持つ健三は、しかし、「姉はたゞ露骨な丈なんだ。教育の皮を剥けば己だつて大した変りはないんだ」(第六十七章)と、自己の「卑小さ」が、脳裏を掠める。

(二)、第百七十五章に、次の如く、ある。

△彼はすぐ水から視線を外した。すると同じ視線が突然人の姿に行き当つたので、彼ははつとして、眼を据ゑた。然しそれは洗面所の横に懸けられた大きな鏡に映る自分の映像に過ぎなかつた。鏡は等身と云へない迄も大きかつた。(中略) 彼は相手の自分である事に気が付いた後でも、猶鏡から眼を放す事が出来なかつた。湯上りの彼の血色は寧ろ蒼かつた。彼には其意味が解せなかつた。久しく刈込を怠つた髪は乱れた儘で頭に生ひ被さつてゐた。風呂で濡らしたばかりの色が漆のやうに光つた。何故だかそれが彼の眼には暴風雨に荒らされた後の庭先らしく思へた。

彼は眼鼻立の整つた好男子であつた。顔の肌理も男としては勿体ない位濃かに出来上がつてゐた。彼は何時でも其

所に自信を有つてゐた。鏡に対する結果としては此自信を確かめる場合ばかりが彼の記憶に残つてゐた。だから何時もと違つた不満足な印象が鏡の中に現はれた時に、彼は少し驚ろいた。是が自分だと認定する前に、是は自分の幽霊だといふ気が先づ彼の心を襲つた。凄くなつた彼には、抵抗力があつた。彼は眼を大きくして、猶の事自分の姿を見詰めた。すぐ二足ばかり前へ出て鏡の前にある櫛を取上げた。それからわざと落付いて綺麗に自分の髪を分けた。√

「心持番の小さい彼の帽子」が、体裁よく、「津田の自我」を包んではいらぬ。

しかし、温泉宿の、「第一日」目、津田は、見窄らしい「自己」の姿を、垣間見る。

「久しく刈込を怠つた髪は乱れた儘で頭に生ひ被さ」り、「何故だかそれが彼の眼には暴風雨に荒らされた後の庭先らしく思」え、「是が自分だと認定する前に、是は自分の幽霊だといふ気が先づ彼の心を襲」う。

この、蒼ざめた、「幽霊」のような姿こそが、実は、「津田の正体」の、何かであるであらう。

小説の後半部で、やがて、津田は、否応なく、剣き出しになつた「自己の裸身」と、対峙することになるだらう。

③【お延は手早く包紙を解いて、中から紅茶の罐と、麴と牛酪を取り出した。

「おやく／＼是召しやがるの。そんなら時を取りに御遣りになれば可いのに」

「なに彼奴ぢや分らない。何を買つて来るか知れやしない」

やがて好い香のするトーストと濃いけむりを立てるウーロン茶とがお延の手で用意された。」

(一)、①、第二十九章に、次の如く、ある。

△津田が手術の準備だと云つて、折角叔母の拵へて呉れた肉にも肴にも、日頃大好きな茸飯にも手を付けないので、流石の叔母も気の毒がつて、お金さんに頼んで、彼の口にする事の出来る麴と牛乳を買つて来させようとした。

ねと／＼して無暗に齒の間に挟まる此所いらの麴麴に内心辟易しながら、又贅沢だと云はれるのが少し怖いので、津

田はたゞ大人しく茶の間を立つお金さんの後姿を見送つた。▽

②、第百六十二章に、次の如く、ある。

△「嘘を云ふな。君位鑑賞力の豊富な男は實際世間に少ないんだ」

津田は苦笑せざるをえなかつた。

(中略)

「事実を云ふんだ、馬鹿にするものか。君のやうに女を鑑賞する能力の発達したものが、芸術を粗末にする訳がないんだ。ねえ原、女が好きな以上、芸術も好きに極つてるね。いくら隠したつて駄目だよ▽

「麵麴」一つだにも、デリケートな、津田の「嗜好」加減が、云われている。あくまでも、「自己の快楽を人間の主題にして生活しようとする津田」(第百四十一章)の、属性である。

第十五章の、評釈①、参照。

第二十章

初出

大正五年(一九一六年)六月十六日・「東京朝日新聞」
大正五年(一九一六年)六月十五日・「大阪朝日新聞」

評 釈

①「藤井といふのは津田の父の弟であつた。」（中略）

早くから彼を其弟に託して、一切の面倒を見て貰ふ事にした。だから津田は手もなく此叔父に育て上げられたやうなものであつた。」

(一)、①、第六十一章に、次の如く、ある。

△小。さ。い。う。ち。か。ら。彼。の。世。話。に。な。つ。て。成。長。し。た。お。延。は、色々の角度で出沒する此叔父の特色を他人より能く承知してゐた。▽

②、第六十二章に、次の如く、ある。

△親身の叔母よりも却つて義理の叔父の方を、心の中で好いてゐたお延は、其報酬として、自分も此叔父から特別に可愛がられてゐるといふ信念を常に有つてゐた。▽

③、第七十章に、次の如く、ある。

△継子の居間は取りも直さず津田に行く前のお延の居間であつた。其所に机を並べて二人ゐた昔の心持が、まだ壁にも天井にも残つてゐた。（中略）四方を見廻したお延は、従妹と共に暮した処女時代の匂を至る所に臭いだ。▽

津田は、藤井の「叔父」夫婦の家庭で、お延は、岡本の「叔母」夫婦の家庭で、人成つた。

漱石は、『三四郎』（明治四十一年・九月〜十二月）で、「現代の女性」（第六章）の典型を、造型してみせたが、その「今の一一般の女性」（第六章）・その「現代の女性」の代表である「美禰子」を指して、「美禰子の父母の存在を想像するのは滑稽であると云はぬ許である」（第五章）と、よし子に、云わせている。

主人公、「津田」と「お延」は、共に「父母」から切り離された存在として、出発させられている。それは、小説

『明暗』の主人公に、如何にも相応しい。

そして、だから、小説の舞台も、「京都」ではなく、あくまで「東京」である。

拙者の、「虞美人草」（明治四十年・六月〜十月）に触れての、「旧稿」を、次に、引く。

△鼎談△（『漱石作品論集成』第3巻、桜風社、平成三年（一九九一年）七月）に、次のように、述べた。

△京都——それは小夜子の琴に代表される古い伝統の世界、対し東京は——小野さんのヴァイオリンに代表される進歩を肯定し変容する世界であつて、この対比は鮮やかです。そしてこの問題は、最後の『明暗』にまで糸を引いており、主人公の津田夫婦が東京を舞台としているのに対し、津田・お延の両親は共に京都に居を構えていて、そして津田とお延が出会つたのも、実は、津田の父親が架蔵する『明詩別裁』・『呉梅村詩』（七十九）という漢籍の貸し借りを通してであつたわけです。この井上孤堂先生も漢文の先生ですね、そこから小野さんは飛び立つて東京の世界に行つた。（中略）そして、比喩とすれば、漱石は伝統の琴ではなく、変容するヴァイオリンをあくまで弾き続けた作家であつたと……。〔P.270〕

作家漱石の「関心」の所在は、あくまで、「今の一般の女性」「現代の女性」である、「美禰子」であり、「藤尾」であり、そして「お延」である。

②【実際の世の中に立つて、端的な事実と組み打ちをして働らいた経験のない此叔父は、一面に於て当然迂闊な人生批評家でなければならぬと同時に、一面に於ては甚だ鋭利な観察者であつた。さうして其鋭利な点は悉く彼の迂闊な所から生み出されてゐた。言葉を換へていふと、彼は迂闊な御蔭で奇警な事を云つたり為たりした。

彼の知識は豊富な代りに雑駁であつた。従つて彼は多くの問題に口を出したがつた。けれども何時迄行つても傍観者の態度を離れる事がなかつた。それは彼の位地が彼を余儀なくする許でなく、彼の性質が彼を其所に抑え付けて置く所為でもあつた。彼は或頭を有つてゐた。けれども彼には手がなかつた。若くは手があつても、それを使は

うとはしなかつた。彼は始終懷手をしてゐたがつた。一種の勉強家であると共に一種の不精者に生れ付いた彼は、遂に活字で飯を食はなければならぬ運命の所有者に過ぎなかつた。」

藤井の「叔父」は、「人生批評家」「鋭利な觀察者」「知識は豊富」「傍觀者の態度」「或頭を有つてゐた」「一種の勉強家」「活字で飯を食はなければならぬ運命の所有者」と、形容されている。

第三十五章では、「先生に訊くと、先生はありや嘘だと云ふんだ。（中略）先生からそんな事を聞くと腹が立つ。先生にドストエウスキは解らない。いくら年齢を取つたつて、先生は書物の上で年齢を取つた丈だ。いくら若からうが僕は……」と、小林から、藤井の「叔父」は、「先生」と、連呼されている。

つまり、藤井は、冷静にして鋭い「批評家」であると、云える。岡本の「叔父」も、「つまり批評家つて云ふんだったらね、あゝ云ふ人の事を。然しあれぢや仕事は出来ない」（第七十五章）と、認めている。

この「批評家」の云う、「奇警な事」は、例えば、第七十五章の、「相変らず妙な事を考へてるね、あの男は」の、「面白いお話し」である、「陰陽不和がまた必然」の説に、代表される。

藤井の立場は、確かに、「批評家」ではある。しかし、『三四郎』（明治四十一年・九月〜十二月）の「広田先生」が、そうであつたよりも、「こころ」（大正三年・四月〜八月）の「先生」が、そうであつたよりも、はるかに後退している。第二十四章では、「始終机に向つて沈黙の間に活字的の気炎を天下に散布してゐる叔父は、實際の世間に於て決して筆程の有力者ではなかつた。彼は暗に其距離を自覚してゐた。其自覚は又彼を多少頑固にした。幾分か排外的にもした。」と、批判されている。「明暗」には、「超越者」は、存在しない。

第二十一章

初出

大正五年（一九一六年）六月十七日・「東京朝日新聞」
大正五年（一九一六年）六月十六日・「大阪朝日新聞」

評釈

①「斯ういふ人にありがちな場末生活を、藤井は市の西北にある高台の片隅で、此六七年続けて来たのである。」

(一)、①、△注解▽（『漱石文学全集』第9巻、集英社、昭和四十七年（一九七二年）十二月）に、次の注解が、ある。
△東京の西北部、早稲田一帯をさす。漱石が明治四十年九月から終焉まで住んだのは、牛込区（現・新宿区）早稲田南町七番地であった。（P.781）△

藤井の「叔父」の家は、「早稲田界限」に、位置する。

(二)、①、「彼岸過迄」（明治四十五年・一月～四月）の、「報告」の第八章に、次の如く、ある。

△敬太郎は後の方に高く黒ずんでゐる目白台の森と、右手の奥に朦朧と重なり合つた水稻荷の木立を見て坂を上つた。それから同じ番地の家の何軒でもある矢来の中をぐる／＼歩いた。（中略）松本の家は此車屋の筋向ふを這入つた突き当りの、竹垣に圍はれた綺麗な住居であつた。▽

②、前田 愛の、△仮家の街▽（『都市空間のなかの文学』所収、ちくま学芸文庫、平成四年（一九九二年）八月）に、次の一文が、ある。

△小川町から西の方向、江戸川線の終点から約一キロへだてた矢来町に、高等遊民を自認する松本の家がある。（P.

「批評家」ならぬ、高等遊民を自認する「松本」の家も、「早稲田界限」に、位置する。

② 「彼は何時もの通り終点を右へ折れて橋を渡らずに、それとは反対な賑やかな町の方へ歩いて行かうとした。」

(一)、①、△注解▽〔漱石文学全集〕第9巻、集英社、昭和四十七年（一九七二年）十二月）に、次の注解が、ある。

△明治四十四年五月十一日の日記に「早稲（田）座を東へ突き当たつて江戸川の終点に出やうとするところは新開町のごたくした所であるが……」とある。大正五年十二月現在の東京市電運転系統のうち、五系統と十系統との終点が江戸川橋となっており、まだ早稲田まで開通していなかったことがわかる。次に「新らしく線路を延長する計画でもあると見えて」と記されているので、大正五年当時すでに路線延長工事がはじめられていたものと思われる。(P.781) >

②、三好行雄の、△注▽〔「明暗」〕、岩波文庫、平成二年（一九九〇年）四月）に、次の注が、ある。

△市電の江戸川終点からしばらく歩いた早稲田界限に津田の叔父藤井の家があり、そこから△半分道▽、つまり半里△2キロ程西寄りというのだから(第二十一章)、津田の家は牛込区内、おそらく飯田橋駅付近にあつたことになる。(P.584) >

第二十二章

初出

大正五年（一九一六年）六月十八日・「東京朝日新聞」
大正五年（一九一六年）六月十七日・「大阪朝日新聞」

評釈

①「だつて此前も其前も買つて遣るつていつたぢやないの。小父さんの方があの玉子を出す人より余つ程嘘吐きぢやないか」という、真事の「批判」は、津田という人間の「芯」を、真直ぐに突いている。津田の「人間性」を、見事に浮かび上がらせる、真事の「言説」である。しかも、「嘘」が糾弾されるに、その名も、「真事」という名の、しかも、子供から。

しかし、津田は、意に介しないだろう。

(一)、①、第百十五章に、次の如く、ある。

△嘘吐といふ言葉が何時もより皮肉に津田を苦笑させた。彼は腹の中で、嘘吐な自分を肯がふ男であつた。同時に他人の嘘をも根本的に認定する男であつた。それでゐて少しも厭世的にならない男であつた。寧ろ其反対に生活する事の出来るために、嘘が必要になるのだ位に考へる男であつた。彼は、今迄斯ういふ漠然とした人生観の下に生きて来ながら、自分ではそれを知らなかつた。彼はたゞ行つたのである。だから少し深く入り込むと、自分で自分の立場が分らなくなる丈であつた。▽

「腹の中で、嘔吐な自分を肯がふ男」であり、「嘘が必要になるのだ位に考へる男」であり、「それでゐて少しも厭世的にならない男」である津田は、実際、「嘘」を吐く。

②、第百三十一章に、次の如く、ある。

△津田は夫人の言葉を聴いた後で、すぐ次の嘘を出した。▽

③、第百四十五章に、次の如く、ある。

△お延は何処迄行つても動かなかつた。相手の手剛さを悟つた時、津田は偶然好い嘘を思ひ付いた。

「実は小林が来たんだ」

小林の二字はたしかにお延の胸に反響した。▽

(二)、越智治雄の、△明暗のかなた▽（『漱石私論』所収、角川書店、昭和四十六年（一九七一年）六月）に、次の見解がある。

△嘘について言えば、『明暗』が始まってまもなく、津田はその名も真事という子供から、その名にふさわしく津田の嘘を非難する言葉を浴びるのだが（二十二）、その直後に今度は真事の母、つまり津田の叔母が「此男は親切で嘘を吐かない人だ」（二十五）と言っていたのが、思い起こされるだろう。実直な生活者たる叔母には津田の「空虚う」（二十六）さがわかつているが、さりとてその「ちゃんとした所」（二十七）を認めぬわけではないのだから、こうした言葉にことさらな毒があるわけはなく、事実、大人たちの世界では特に津田が嘘つきであるわけではない。現実の生活の中で彼はごく平凡にしかし一応なめらかに生きていくということなのであって、それは、『道草』（大四・六〇九）を通過した漱石の造型にふさわしい。（P.351）▽

云われるように、「大人たちの世界では特に津田が嘘つきであるわけではない」のであって、多かれ少なかれ、「大

人」たちは、津田のように生きている。あくまで、程度の差に過ぎないであろう。換言すれば、津田の、「いやらしさ」は、津田固有のもの謂ではないであろう。苟も、大人「万人」が、等しく共有せる「属性」そのものの謂を、津田に「代表」させている。

第二十四章

初出

大正五年（一九一六年）六月二十日・「東京朝日新聞」
大正五年（一九一六年）六月十九日・「大阪朝日新聞」

評釈

①「あのね、岡本へ行くとな、何でも一さんの持つてるものをね、宅へ帰つて来てからね、買って呉れ、買って呉れつていふから、それで不可いつて」

津田は漸く気が付いた。富の程度に多少等差のある二人の活計向は、彼等の子供が持つ玩具の末に至る迄に、多少等差を付けさせなければならなかつたのである。

津田の「叔父」である、藤井の息子「真事」と、お延の「叔母」である、岡本の息子「一」が、比較されている。それは、取りも直さず、津田の「実家」と、お延の「実家」の比較でもある。

第七章の、評釈⑥、参照。

附記

一、「明暗」本文中、○印は鳥井。

一、「明暗」本文の引用は、岩波書店刊「漱石全集」第七卷・「明暗」
に拠った。但し、旧字は、新字に改めた。

(昭和四十一年六月二十三日第一刷発行)
(昭和五十一年六月九日第二刷発行)